社會叢書

第四卷

事務世界

東京民友社發行

社會叢書第四卷

事務世界

目次

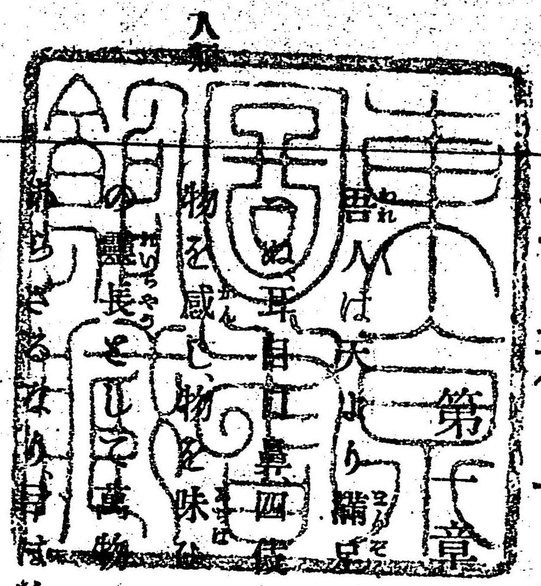
(一)事務……一頁
(二)事務世界……二〇
(三)事務要義……二九
(二)勤勉……三〇
(三)規律……三三
(三)正直……三五
(四)敏捷……三六
(五)耐忍……三七
(六)信用……四〇

三〇 昭明

(七)自　信……四二
(八)精　細……四三
(九)常　識……四三
(十)健　康……四五
(四)事務家……四七
汽車發明家ジョルヂ、スチフエンソン……四八
水道家ゼームス、ブリンドレー……六二
紡績王リチアヤド、アークライト……六七
富豪家リンドセー……七六
牧羊詩人ゼームス、ホッグ……八三
三菱社長岩崎彌太郎……九九

第一章　事務世界

事務



人間は天より備はり、耳目口鼻四肢五躰を具足し、物を視、物を聞き、物を嗅ぎ、物を感じ、物を味はひて少しも不自由なく造れり、吾人が萬物の靈長として萬物の上に立つ所以のものは、必らず偶然に備はりたるなり事務は物を見る爲めに備り、口は物を食ふために備り、耳は物を聞くべきために備らば、人間の手足は働らくべくために備りたるものなり。

事務とは皆それ〳〵の道によりて適當に身躰をつかひ手足を動かして日々生活の方法となすものなり、事務にはいろ〳〵の區別あれども必竟するに精神を勞するか、肉體を勞するの謂に外ならず、事務とは此世に生れ出で爲すことなくブラ〳〵として過さず、何か仕事を試みて人生たるものゝ職分を全するの謂なり。

最も憐むべきもの

若し人間にして何事も試みずして一生を終らば、それこそ蟲類にも劣るべし、いな蟲類は人間よりも遙に事務を爲しつゝあるなり、人間よりも勤勉なり、世の中に最も憐れむものは何なりやと問ふものあらば、無職業を以て畢生を徒爾

に終るものなりと答ふるに躊躇する所なし。

五躰五輪を具備したるものが無職業ほど恥辱なるはあらざるべし、職業則ち事務は貴賤貧富に係はらず、人生の義務として必らず爲さゞるべからざるものなり、世の多の人は大抵皆それ〳〵の事務を有す、然れども廣き世間には立派に天より身躰を授りながらブラ〳〵主義のものを見るは何ぞや兩眼を失ひたる盲人すら夫相應の職業を有するにあらずや、啞者すら聾者すら、跛者すら、其他身躰の措置すら不自由なるものにても夫相應の職業を有するにあらずや、

チヤリ子は片脚ながら曲馬を以て其名を世界に轟かし、が

兩腕なき人

飲食と運轉

ンベッタは片眼ながら軍人の軌範となり、塙保巳一は盲目ながら文學歌曲に長け、澤村田之助は兩脚を失しながら名優の名今に傳ふ、ウリルトンと呼ぶ男が、牧師ウエスレーに贈りたる書簡に兩腕なき人の事を記せり、曰く

「予は一人の朋友と共に兩腕なき人の爲に朝飯の馳走になり行けり、予は彼が樣子を見るに、「テーブル」の上に半分脛を露はしたる脚を載せ、其足先と其指とにて茶と燒パンとを親指と第二指とにて其口に運ぶさま、宛然手と指が爲す如くに至つて上手なり、予は「ペン」と「インキ」壺を添へて白紙を牀の上に置きたるに彼は(勿論靴はなし)左の

足先の働

足にて「インキ」壺を取り上げ、右の足の指に「ペン」をはさみ、三行の文字を認めたり、其書躰は普通の人の手にて書きたる如く、又其書き振も速なり、其他の事をも書きて見せ」たり。

彼は自身にて衣服を着また衣服を拔ぐこと自由なれどボタンをかくることばかりは爲し叶はず、彼は自づから食事するため足先の働きにて匕や「フォルク」をあつかひ、肉にても汁にても口に運ぶこと自由自在なり、足にて靴もみがけば「ナイフ」も研ぎ、燈火も點し、普通の人の爲すやうなる家庭の事務は悉く自身にて辨ずるなり、彼は「ペン」

野の事務

を入れ置く箱すら製造す。

彼が職業は農夫なり、農夫なれば彼は足の指にて牝牛より乳を搾り、藁を切り、それを束ね家畜を養はんが爲に野に運び行くなり。

昨冬彼は八頭の小牝牛を持ち、昨夏枯草の一堆を造りぬ、彼は大抵藁野の事務を爲し能ふなり（苅ることは叶はず）彼は足にて他の人の把手や叉股にて爲す如く自由自在なり、彼は野に行きて飼馬を捕へ又其足にて荷を積み手綱をとることまで熟練せり。

彼が多くの羊を飼ひ其内にて病氣に罹るものある時は、

他のものより外に隔離すること常人にてもなかなか及びがたし、彼は斯の如くにして其病羊に治療を與へぬ。

彼は恐しく齒の力能く蠶豆の十「ペック」位はくはへて擧ぐること最も容易なり彼は普通の人が手を以て爲すが如く足にて大槌を遙の彼方に投ぐることも容易なり、一言にして言へば兩手なしに殆ど他の尋常人が兩手で爲すことをやり遂ぐるなり云々、

兩手なき人ですら斯の如く日々の事務を爲し行くにあらずや、滿足の人にて事務が出來ぬなどゝ言ふものあらば、それこそ意氣地なしの絶頂と言ふの外なし。

また資本金なければ事務が出來ぬなどゝいふもあらば、これも道理を知らぬことなり、爰に千圓の資本金を所持する人ありと假定せよ、之を銀行か又は他へ預けて一個月六朱の利にて見積れば一個月六圓の利子金を得るなり、然るに爰に身躰を勞して一個月六圓の給料を取らば、其人は身躰に千圓の資本金あると同樣にあらずや、六十圓の月給あらば一萬圓の資本金あると同樣なり、六百圓の月給あらば、十萬圓の資本金を所持すると同樣なり、されば必らず資本金なきを嘆つ勿れ、資本金は其身躰につき居るなり、物質を所持せる資本金は盗難、火難の禍にかゝる事あるべきなれど、

身躰につきたる資本金は其人の健康なる間は空乏に歸することなかるべし、吾人が事務を擧ぐるため資本金なきを患へざるは此處の謂なり。

さて事務と一口に言へどいろ〳〵の區別あり、事務には商業の事務あり、職工の事務あり、官省の事務あり、軍人の事務あり、文學の事務あり、美術の事務あり、農業の事務あり、學問の事務あれど、文學若しくは美術若しくは技藝若しくは政治に關する事業は、天才に屬するもの多く、こゝに一定の理論を以て判斷し難きもの少しと爲さず、故に之より述べんと期するものは世間の所謂『事務家』を養成するにあるなり、而

して又該篇『事務世界』とは、資本の運轉又は活用などを論ずるものにあらずして、如何にして人が腦と手と足とを以て其道の事務を爲すべきかを論するにありと知るべし。

蓋し事務とは手足を勞して人生の職分を盡す所以にして、大小と階段こそあれ事務は、勞働を意味するものなり、勞働と言へば、之を賤むものもあらんかなれど、勞働則ち事務あればこそ、社會も成立ち、政治も、商賣も、法律も、職工も行はるるなり、若し世に事務なからんか、世界は闇黑となり、社會は乾燥し、吾人は日々の生活を爲し遂ぐること能はざるべきは勿論なり。

事務は吾人をして如何にして人生の目的を遂ぐるに、其順便なる方法を示すのみならず、事務は吾人の品行なり、事務は吾人が德性を養成する第一要素なり、其證は多言を要せず、事務を有せざる人の品行不完全にして、德性、智性兩つながら不健全また動もすれば罪惡に近きに反し、事務を有する人が、德義、知識共に健全なるを見ても知り得べし。

或者は手足を働かす事務と精神を使ふ事業(譬へば學術、文學、美術、技藝、政治等)とは各々其途を異にし、事務の熟練を以て、到底思想界の事業に及ぶべからずと爲すものあらん、然れどもこれ大なる心得違なり、文學の上にても技藝の上に

ても秩序なかるべからず、思考なかるべからず、決斷なかるべからず、忠實なかるべからず、剛健なかるべからず、敏捷なかるべからず、勤勉なかるべからず、耐忍なかるべからず、古も今も事務の才幹を有せざる思想界の人物は、大率此弱點によりて失敗せり、文學の天才を有しながら不秩序なるがため、政治の天才を有しながら勤勉ならざるがため、美術の天才を有しながら敏捷ならざるがため、大詩人の天才を有しながら不耐忍なるがため遂に成功の域に達せずして止むもの多し、併しながら事務に熟練するに於ては、勤勉、忠實、剛健、敏捷、秩序、思考、決斷、耐忍自つから其間に養成せられ、之

を高尚なる思想界の事業に移すも、決して遲鈍を取ることあらざるべし、眞理に二なし、勞働上の業も思想上の業も精神に於ては一なり。

事務に從事し、之に鍛錬すれば、次第〳〵に其人の腦髓組織的となり、思考緻密に進み、自つから會得し、自つから發明し、自つから實行す、其作用上の靈妙に至りては、徒座空想の人の及びがたきもの多し、さてそれは何がゆゑに然るか、事務に從事するものは、其思考と共に實行の權利を有す、實行の德は、千百の空想よりも其價貴く、たとへ些少の實行と雖も、寢て居て不思議靈妙の空想より勝ること萬々なり、爰に一

例を擧げて言へば予が知れるものに二少年ありき、甲は寧ろ乙よりも才幹ありき、乙は家貧なるがため、十五六歳の頃某銀行の小使となり、甲は同じ目的にて其道の學校に入りき二人とも勤勉なりしに係はらず、七八年の後乙少年は其銀行の副支配人にまで昇進せしに、甲は卒業後某銀行に入り學校に受けし學藝を以て銀行の事務を扱ふに二三年を經過するも、其事務乙少年の如く敏捷ならず、耐忍ならず、決斷自由ならずして、到底其事務の上に甲乙雁行し能はざるのみか、乙は成功し甲は失敗せり、これ他なし、乙少年は十五六の歳より、日々扱ふ事務の經驗により、鍛練により、會得

により、工夫、創作、決斷、處理、實行、自づから自由自在となりたるに外ならず、之を以て見るも事務の鍛練は、其手と足とを鍛練するに止まらず、其心思を鍛練して完全なる事務家を形造するに至るべし。

事務を取扱ひし人が、如何に其思想の高尚なるか、其技藝の妙境に達せしか、之を泰西の實例によりて按ずるに、英國の勇將ウエリントンは其軍中に在りて部下に食物の製法を教示し、又印度にありし頃は牛を牧する術の遲鈍を研究して其成蹟を得しにあらずや、米國の第一代の大統領ウワシントンは少年の頃、證書、手形、請取等に能く念を入れて寫せ

し事蹟あるにあらずや、有名なる「ロビンソークルソー」の著者デフォは或時は馬商となり、或時は煉瓦商たり、詩人ミルトンはコロンウエルに仕へて書記官たるの傍詩想を鍛練せり、性理學者ロックは交易事務官たり、セックスピヤは劇界に身を置きて金錢を出納しながら絶代の院本を殘せり、ジョン、スチユアート、ミルは著作の初年は東印度英官舍の檢査官たり、ベーコンは勤勉なる代言人たり、獨乙のシルレルは外科醫なり、文學者マコレーは印度に於て勤勉なる法律顧問官たり、英國の最も古き詩人チヨーサアは稅關の小吏たりしにあらずや、其他數ふるに遑あらず忙しき事務の中

より閑暇を得て、著作に從事するは、決して勞苦にあらず、寧ろ快樂なること渴したる鹿が泉水を飲むが如けれど、專ら著述を業とするものは、宛も飢へたる犬が食物を求めて奔走するが如しとギツフテルドが言ひしは蓋し當然の言なるべし。

眞理は必らずしも書物の上にのみ存せず、又は人の談話の上にのみ存せず、吾人が日々取扱ふ事務の上より得らるもの多し詩人は動かざる山や、川や、草や、木に於てすら眞理を會得するにあらずや、況んや吾人は日々活動する事務の上に於て多少の眞理を得ることなしとせんや、車夫も日々の

事務の快感

事務によりて眞理を感得し、鍛冶屋も日々の事務によりて眞理を感得し、大工は大工、左官は左官、其道に大小上下の別あれど、其事務によりて眞理を感得するは一なり、事務は眞理を感得すると共に、また快味を會得す。

事務を有せざる人は死したるも同樣なり、之に反して事務を有し日々孜々營々たらば、快味も希望も之より生じ、たとへ老年に及ぶも其人の心は老いざるなり、たとへ死しても其人は現世界に存在するも同じ、若し事務を取扱ひて勞苦のみと思ふ人あらば、汗は未だ事務の眞意義を解せぬものなり、眞意義を解したらば快味も、安心も、希望も之によりて

日々の事務こそありたけれ

生ずるは疑なかるべし。

吾人は切に望む、政治家にても、文學者にても、詩人にても、美術家にても、日々の事務こそ有りたけれ、事務は獨立の根本なり、政治家にして腐敗し、文學者、詩人、美術家其他高尚なる思想界の人にして勢力又は金錢の奴隷となるは何ぞや、これ取りも直さず、事務といふ獨立の根本なければなり、事務には罪惡ならざる限りは上下貴賤の區別なし、職工にして政治家たることを何ぞ耻ぢん、勞力者にして哲學者たることを何ぞ耻ぢん、商估にして文學者たることを何ぞ耻ぢん、此類未だ我國には少けれども、歐米諸國には稀らしからざ

る事實なり。

第二章　事務世界

事務世界は實に廣大なるものなり、商業にまれ、工業にまれ農業にまれ、官業にまれ、到底其區域を一定すべからず、士農工商など一口に言へど其種類の多きことは筆紙に盡しがたく其道々によりて人の力を要するなり、人の力によりて事務を擧げ以て其事業を實行するなり、社會が文明の境に進歩すればするほど事業の數は增加すると共に、其事務を擧ぐる爲めに人の力を要するなり、事務は文明の社會には

倍々有望のものなれば、之に取りつき居らば、決して人生の目的に外るゝことなかるべし。

然りと雖も文明が進歩するに從ひ、機械の力は能く人の力を減殺し、終に人の力をして無用に屬せしむるやうの觀あれども、實は然らず、文明の進歩は機械の力によりて人力を適當の事務に使用せしむるものなり、一例を以て之を言へば東京に於て始めて電話架設ありし時に、或人遞信省の某局長に向ひ電話架設なりたれば、此便利により定めて書簡の數は減ぜしなるべしと言ひしに、官吏は頭を掉りて曰く、全く然らず、文明の事業はなか〳〵面白きものにして電話

が架設になりたれば、またそれにつきて用事起り、書簡の數は却つて增加したるの傾ありと答へしとなり、鐵道敷かれ濕車長蛇の勢を爲して疾走するの便ありてより、沿道の勞働者(雲助又は車夫の如きもの)は一時職業を失ひし如き觀あれども、鐵道の便利は更に旅客を多くし、荷物運輸を盛にし、工夫人足を需用し、また其他の商賈盛に、また其地の產物鐵道によりて東西南北に走り、之によりて勞働者は其道々に從ひて事務を司り、以て生活の道とするを得たり、くれぐれも文明は決して人力を埋沒するものにあらず、文明は社會を單簡にするものあらず、實は複雜にするものなり、複雜

にすれば矢張人の力を要せねばならぬなり、餘り世の中が便利になり過ぎて試むべき仕事がないなどゝ申す人あらば、开は文明の罪にあらずして事務を發見せぬ罪なり、文明の世の中には、事務は餘りあるほどあれども、奮發心のなき人と怠惰の人には、如何に事務が有り餘りても、實行すること能はず。

事務には大小繁閑の差はあれど、手足を働かすは同じ事なるが、昔し江戸には耳の穴の垢を掃除して日々の事務とするあり熊の毛皮を携へて猫の蚤を取り歩きて日々の事務とするあり、現今に於ても大道に立ちて人相を見周易を考

へて日々の事務とす、是等は閑の閑なるものにして、我國の文明が進歩するに從ひ、漸次に影を收むるものなれども、轉じて取引所の取引などの現況を見ば、耳、聾し眼舞はんばかり、試みに米穀取引所又は株式取引所の場内に至り見よ、高臺の上に一月期二月期と所員が高く、叫ぶ聲に、其下に蝟集する仲買人等は喧々囂々宛然戰爭か喧嘩かを見るが如く手振等が「ヤリ」「カヒ」の勇しき掛聲と共に手を動すのみにて、一瞬間に千枚二千枚乃至其以上に係る多數の取組出來し、毫も間違なきを見ば、如何に事務世界の多忙なるかを見るべし、これは取引所のみならず、鐵道にても銀行にても商家

にても、新聞社にても、市場にても、會社にても、工場にても、官省にても、苟も文明社會に需用多き事務は、大低多忙ならざるはなし、閑散なる人が一たび是等の社會へ足を運ばゝ、其の多忙繁雑なるにも係はらず、其事務員は孜々營々之を營むの勤勉なると、是等の事務を擧げて遺算なきに驚かん。何をしても文明に遲れぬ事務を心がくべし、文明の事務は需用多く、また其事務を止めて他の事務にかゝるも決して差支あることなかるべし、文明の事務は種々ありてたとへ種類異なるにせよ、其系統は一なり、たとへば銀行の事務より會社の事務に移るは最と易き、が如し、社會の文明といふ

は、必竟するに、個人が文明的事業を勉勵する結果に外ならず、國に文明的の事務を取るもの多きに至れば、取りも直さず其國は文明的となるなり、國家の進歩と富强を致すは、實に個人事務の勉勵にあるなり。

成るべき繁忙なる事務を撰ぶは、文明的事務を取るの第一手段なり、繁忙なる事務を掌握すれば、それによりて智識を得、經驗を得、生活の完備を得るのみならず、其氣象鋭敏となり、剛健となり、氣根强く耐忍力加はり、何事を試みても成功の便となるべし、人の此世に足跡を止むるは必らずしも大政治家に限らず、大軍人に限らず、大文學者に限らず、人々は

繁忙の事務

みな世の歴史に事業を殘しつゝあるものなり、されば人は出來得るだけ多く世に事業を殘さんとならば、身を多忙に處する好手段に如くはなし、人生五十年にあらずや、五十年の内に多くの事業を爲さんとならば、是非とも多忙ならざるべからず、此の五十年の貴重なる時間を醉生夢死に過すは蟲類にも劣ることなり。

正當の事務

文明的則ち進歩的事務を取らんとならば品格ある仕事にかゝるべし、品格ある事務とし言へば、華族樣でもなさるか、または お茶の湯とか、活花とか、又は花車風流の仕事と思ふ人あらば、そは誤解の甚しきものなり、吾人の眼中には大臣

の事務も、大工の事務も、文人の事務も、左官、車夫、鍛冶屋、畳屋、穢多も等しく正當なる事務と思考するを以て、等しく品格ある事務と見做すものなり、然れども社會には光明の側面あると共に暗黒の側面あり、社會の暗黒なる側には不正當にして罪悪に近き事務尠からず、これ最も忌むべきものにして、事務を取りて社會に立たんとする人が宜しく注意すべきことなり、不正當の事務は罪悪を賭にして試むるものなれば、其報酬正當の事務より多きを以て、人は往々かゝる邪道に誘引せらるゝに至るなり、事務は神聖なることを忘るべからず、正當なることを忘るべからず、職分なることを

忘るべからず、此心ありて事務の種類を撰まば大なる誤なかるべし。

今や我國の事務社會は、思想社會に新舊の差違あるが如く、日本舊來の組織と泰西的の組織あり其形體こそ異なる所もあれ、其の事務を取扱ふ精神に至りては同一なり、吾人はこれより事務を扱ふ要旨につき、瑣言を呈して一讀を煩はさんと欲す。

第三章　事務要義

如何にして事務家となり如何にして事務を取扱ふべきか

の要義をこれより錄す。

(一)勤勉　成功の道は勤勉にあることは申すまでもなきことなり、昔より勤勉によりて志を貫き業を遂げたれど、怠惰にして成功したる類例なし、軍人にても、商人にても、文人にても、職人にても其論異なることなし、大禹が水を治め家門を過ぎれども入らず、那翁が馬脊に跨りて睡りしも勤勉なり、成功の第一要義は勤勉にありと思はゞ間違なし、殊に人に雇はれ居るものは、勤勉を第一とすべきは勿論、多くの人を雇ふ主人となり、長となり、幹となるものも勤勉せざれば事業に油斷を生ずるのみならず、以下の雇人又は共同者も

緩漫に流るゝなり、事業が大きければ大きほど勤勉ならざるべからず、世界第一の金滿家故メヤー、アムシル、ロスチヤイルドの長子アルセルム、メヤー、ロスチヤイルドの事につき記事あり、左に

ファルガアスに在る彼の住宅は外見質樸なれども、世界の中に最富者の住宅たるに耻ぢず、彼が其事務室にあるや恰も裁判官の如く室の中央の椅子に倚り、卓の前面に數多の書記を控へ其周圍には幾百の仲買人等出入混雜すれど、彼は日々他の事務員と同樣に堅く事務時間を守り、遊樂などは寧ろ好まざるかたにて事務を執ることを

好む、而して彼は常に商業上の景況を探訪するため、諸方の市場へ取引場所等に人を派遣し其報告を待ち深夜と雖も、探訪使の急報を齎らすことなれば、寢室を出でゝ精細に調査し、若し必要の件あれば、遲疑なくバリー、ウイン

ナ、チープルス又はロンドンにある兄弟等に、通報しぬ、斯の如くして彼は倍々事務を簡易に、敏捷に處理せんが爲に、事務室と寢室とを密接して造營し之に通路を設け置きたり云々

見るべし、彼等一家が世界に金權を奮ふの偶然ならざるを、事務を勤勉せんと欲さば、熱誠の精神を注ぐべし、全力を籠

むべし、たとへ些少の事にて我力に餘れるものにても、また は我意に不滿足なる事務なりとも、其事務を執る間は熱誠なるべし、獅子の兎を打つや必らず全力を用ゆ、吾人が事務の主眼とすべきはこれなり。

(二)規律　事務家は規律を守ることも亦最も大切なる事柄なり、事務家は機械の一部なり、機械の一部として滿足せざるべからず事務家は時計や其他の機械の如くキチン〳〵と事務の上に働かざるべからす、斯くするには是非とも規律を立て置き其規律に分厘の相違なく履行すべきを要す規律ある以上は決して貧を取ることなし、朝寢坊をするは、

朝起の規律を守らざるが爲めなり、日清戰爭にて支那軍が日本軍に打負たる重なる原因は、其軍に規律なきが爲なり何事に限らず繁雜なる文明的事業は、必らず豫め成算あり一定の規律を立て置きて、其通りに分厘の間違なく實行するを以て事務は滯りなく行はるゝなり、若し其事務機關の或部に遲滯を生ずるに於ては、決して其目的を貫徹すること能はざるは勿論なり、故に事務家たるものは、茲に能く意を注ぎ、勤務時間より、日々爲すべき事務の順序などを定め置き、必らず其通りに着々實行實踐するを要す、一部の規律を失して全部を誤るが如きは往々珍らしからぬ事なり、怠

慢又は其他の事情によりて規律をあやまるもの多きは慨すべし。

(三)正直　「正直の頭に神やどる」實に然り、大に然り、正直は成功の早道にして不正直は事業の妨害物なり、商家で不正直なれば其家に客來らず、職人で不正直なれば、何人も雇ふものあらざるべし、正直ならざる人は如何に勤勉なるも、如何に腕前のすぐれたりとも到底世の信用を博しがたし、こゝに事務上の正直とは、能く規律を守り、能く勤勉し、能く支配者の命令を實行するのみならず、金錢上の間違なきは言ふまでもなく、能く約束を守り、たとへ勤勉、敏捷、正直なりと評

判宜しくとも、決して他に誇らず、謙遜の德を守り、上に一つらはず、下を虐げず、只管熱誠を以て事務を鞅掌せば雇人ならば、雇主の信用を得、同じ仲間よりも評判宜しく、つまり成功の早道たるべし、世に正直を見て馬鹿正直などゝ言ふこそ可笑けれ、正直は怜悧者の有する最良手段なるを知らずや。

(四)敏捷　正直と敏捷とは正反對なりと思ふ人あれど、それは正直と遲鈍とを同樣に見たる誤解なり、正直の中に確に敏捷あるなり、さて如何にして敏捷に事務を擧ぐべきか、勤勉なるも、敏捷ならざれば能はず、規律を守るも敏捷ならざ

れば能はず、時間を活用するも經濟するも、事務の秩序を調へ急速に之を處辨するはこれ敏捷の働きなり、敏捷の働きを適當ならしめんためには、其事務に能く慣れ失敗もし、成功もし且つ事務の事情を知悉し漸次に經驗を積むに從ひ、敏捷の働き自在となるものなり、敏捷の働きに最も必要なるは、決斷と實行なり、決斷と實行とは最も經驗の功に居るもの多し、されば事務に經驗あることと肝要なり。

(五)耐忍　耐忍は實に成功の母なり、耐忍は人の最大勢力にしてまた最大美德なり、如何に勤勉なるも、如何に正直なるも耐忍則ち辛抱の力なければ失敗の本なり、雇人ならば如

何に辛苦艱難に遭ふも不撓不屈の精神を貫徹すべし、事務に從事する間はうきつらきこと多かるべし、嚴なる雇主に遭ひては一層も二層も辛苦を感ずべしと雖も、古來成功せし人を見るに、大率嚴酷なる支配者を頂ける人物なり、「雪の日やあれも人の子樽拾ひ」と吟ぜらるゝ小僧も七年十年年季を勤むれば立派に一家を持てるやうになりぬべし、耐忍とは堪へがたき苦痛の場合に適用するものにして、かゝる場合なければ、耐忍の勢力を發輝することなし、また自分が主となりて事業を始むるにも失敗は必らず之に伴ふべし、失敗毎に其苦痛は堪へがたかるべし、然れども其難所をば

耐忍の勢力を以て打勝ち通ることこそ勇ましけれ、失敗に落膽沮喪するは、決して成功の人の爲すべきことならず、死するまで、斃るゝまでに行くべし、有識なる社會は情死を笑へども、事業の爲めに斃れたりとて之を笑ふものあらんや、人の事業を貫徹するや、大なれば大なるほど失敗多く、また他の嫉妬、呪詛、妨害多端なれど、そこを大膽に切り拔け目的の處に達するが男子の最大面目なり、見よ、漢の高祖も、足利尊氏も、德川家康も、終の勝軍によりて天下を掌握したるにあらずや、政治家、軍人に限らず、古より豪商、大文學者、大美術家と稱せらるゝ人も、大低失敗と蹉跌によりて最後の勝利を得

たるものなり、耐忍の美德ある人は、艱難と失敗ある毎に剛健の氣象を養成す、事務を取扱ふ上には最も此の剛健の働きあるを要す。

(六)信用　事務を執る上に於て信用なかりせば到底其運轉を全ふすること思ひも依らざることなり、信用は一の勢力なり、信用は一の資本なり、たとへ事務家に巨大の資本を有すとも、社會又は他人よりの信用なければ、其目的に達することと困難なり、政府より發する兌換紙幣と雖も、信用なければ一日も通用しがたし、約束も命令も勞力も信用といふものあればこそ、圓く事務の機關が運轉し行かるゝなり、事務

を扱ふ人が如何にして他人又は雇主の信用を得んとするか、其正直なる所に信用起り、其親切なる所に信用起り、其機敏なる所に信用起り、これなれば此事を委頼しても間違なかるべし、此人ならば此仕事をさせても失敗なかるべし、此人物ならば約束をしても錯誤を生ずるなかるべしと而して其通りに運べば信用は倍々厚くなるなり、殊に商家の如きは信用一つにて運轉するものにして、資本金が無くとも信用さへあれば、立派に社會に事業を試むること容易なり、小僧に千圓二千圓の大金を持たせて晏如たるは全く信用といふものあるが爲めなり、米屋町などにて正則をくゞり

てなす合百などの如きも、相場が立つ時、往來しながら、ちよと手先にて相圖をし、嚴なる約束もなく、證人もなく證書もなく賣買の約束を爲して、紛擾なければこそ、犯則をしながらも其商法をつゞけ行くなり、彼等の社會は沒道德の人物のみに滿され居るにも係はらず、かゝる簡便なる仕事を爲すは、必竟信用といふ二字に重きを置けばなり、事務の要は信用なるかな。

(七)自信　他人より信用を博すると共に自信の念强からざれば成功の妨となるべし、自から其行爲と其事務とを信じて行はねば、成功は勿論日々續け行くことさへ爲し能はざ

る事なり、自づから信じて行ふ事務は、誰が何と言ふも他に如何なる妨害あるも、決して其等に頓着せず、行く所まで行くべし、自信なければ、自づから治むること自づから營むこと、決して思もよらず、耐忍といふ剛健の力の湧く所は、此の自信にあれば、自づから信ずる限は飽までも固執なるべし、飽までも剛愎なるべし。

(八)精細　精細なるは事務に親切なる所以なり、事務をする以上は我と他人の事に係はらず、すべて我事と思ひ親切に取扱ふべし、事務に熱誠なる人は其取り扱ふ事務を愛す、愛するが故に親切なり、親切ならんとせば精細ならざるべか

らず、精細とは萬事心をつけて油斷なきやう、抜目なきやうにする謂なり、萬事に心を配れば、決して事務鞅掌の上に失敗を招く患なかるべし、精細なる取扱は精細なる注意にありと知るべし。

(九)常識　常識とは英語にて「コンモンセンス」の謂なり、事務家の資格には必らず此の常識を有せざれば、萬事に差支を生ずる事有勝の事なり、事務家は世を避けし僧侶や、詩人や又は偏狹なる見識を懷くべからず空理空想にして、偏狹なる見識を有しては、一日として事務を擧ぐること困難なるべし、事務家は社會の事情に通じ事務の形勢に明にして、世

に居り俗に處するの才なからざるべからず、さて「コンモンセンス」の有すると有せざる人は其天稟に依るもの多しと雖も、事務家を以て成功せんとならば、幼時より其教育を要するなり、幼時より空理空想又は偏狹なる教育又は迷信を以て教育する時は、人の性は次第に常識を失ふに至るべし、されば事務家には最も普通教育必要にして、科學の才識を要す、科學は道理の在る所を教ゆるものにして、道理以外の空理空想を許さゞればなり。

(十)健康　身躰を資本にして稼く事務家には、健康も何よりも第一に肝要なるものなり、如何に事務に勤勉したくとも、如

何に事務に熱誠なればとて、肝腎の身躰が不健康なれば、如何ともなし難し、隨分青年にして有爲活達の志望を懷きながら、身躰の不健康なるが爲め、可惜其志望を實行する能はず、或は中途にして斃れ或は今や成功せんとする間際に早くも無常の風にさそはるゝ不幸に遭遇するは、職として身躰の健康ならざるに歸せずんばあらず、事務家は機械と同じやうなるものなれば、機械に損所が出來れば、其運轉困難なると等しく、人も身躰に破損ありては役に立ちがたし、而して成功なるものは大低經驗により、年功によりて始めて完備するものなれば、年齡を積まざれば老巧の境に至ること

と最も難し、東洋西洋を問はず、昔より大名を殘せし人は七十又は八十と老年の壽命を保ちしもの多きにあらずや、老年になれば事務の熟練は言ふまでもなく、他の妨害、嫉妬等も尠くなるゆゑ、他に秀でゝ益々成功の域に達するなり、されば少年時代より衛生に心を用ゆべし。

以上十箇條事務家の心得となるべき概略を記し終んぬ、此他に事務取扱の要義尠からざるべし。

第四章　事務家

是より事務によりて成功したる有名なる人物を摘錄して、

彼等が如何なる方法により、如何なる運動により、如何なる道程によりて其目的を貫徹したりしかの概略を示さん。

汽車發明人　ジョルヂ、ステフエンソン

余は茲に世界の有名なる汽車發明人ジョルヂ、ステフエンソンの事を叙すべし、蓋し此人の傳記は世人に利益を與ふること尠からざるべし、而してステフエンソンが成功の如何なりしかは現今盛に行はるゝ汽車行動機械の組成は、全く此人の創作發明に係るを以ても知りつべし、然れども彼の生活の前半は頗る卑賤貧窮なりしと雖も、其後半に至りてはウヅット、フルトン、アークライト、ブリンドレーの諸輩

と名を齊ふするに至りぬ。

誕生

ステフエンソンは千七百八十一年(日本紀元二千四百四十一年、天明元年)六月九日、英國ニウーカス港より八里程なるウイラムの一小村落に誕生せり、彼は人より老ロッブと呼ばれたるロベルト、ステフエンソンの六子の中の第二番目なりき、ロベルトは勉強にして節儉なる人なりしかども、炭坑機械場の火夫を働き、一週間僅に十二シルリングの賃銀を得て細き煙を立て行けり。

其父

英國北方(ダルハム)の炭坑人民は移住に於て有名なり、彼等は一の炭坑を見出せは直ちに其所に移住して石炭探掘に

移住

最初の仕事場

牛の番人

從事す、則ち炭坑を追ふて移住するなり。ベルトも亦ジョルヂが未だ八歳ならざるにジュウレー、ポルンに移住せり、是ぞジョルヂ、スチヤンソンが始めて職業に取りつきし場所なり。

去りながらジョルヂは炭坑の機械方に從事するには未だ年齢弱けれど徒に遊ばせ置くべきにあらず、此小兒の身定まらざる處に、恰も好し、其所に數頭の牛を飼ひて營業とする寡婦あり幸ひ牛の番人を欲しき談にジョルヂは喜び勇みて之を諾し、一日に二「ペンス」の約束にて牛の番人となり其外一日四「ペンス」にて狼茱より雑草を刈除く仕事に雇はれぬ、これ此少年が人生の生活の道に入りし第一發端なりし。

端生生活人の發

火夫助手

大望成就の端緒

其後ジョルヂは蒸氣機關に關し種々なる利益を感じ、己も其父の如く煮立つ蒸氣釜の下にて火夫の仕事を爲んと思ひ立ちしが、三四年を經て彼の父はジョルヂをしてジュレー坑内の火夫助手を爲したり、其給料は一日一「シルリング」(四十錢位)を納むれども此少年の目的は金錢の外に他の目的を存せり、蓋し此仕事は彼の大望を成就せしめたる端緒なり、若し彼にして目的を成就すべき丈の技倆と忍耐なかりせば失敗目に見る如しなりしかども、彼は此道理を會得

眞實の目的

勝利の聲

善良なる職人

せるが故に非常の勉強と忍耐とを以て機械部屋の中にありて「彼自身」を造る事を忘れざりし、彼の眞實の目的は「彼自身」を造るにありき、彼は日夜活きたる機械に接し活きたる機械の働作を會得し、而して彼は無情の機械に對して一種の親愛を生じ、機械と共に相互の利益を得たり、彼が十五歲に達して見事火夫の資格を造り、直ちに炭坑夫に雇はれし時「余は今こそ世の中の人間となりたり」と勝利の聲を放ちぬ。

斯くてジョルヂ、ステフエンソンは速に善良なる機械方、思想先見もある職工となれり、彼が十八歲の頃には機械上の

憐然なる文盲漢

實地の學問

學問は進歩上の必要

卓絶なる知識を得しに係はらず、一面に於ては眼に一丁字なく手に「A」「B」「C」を書くことすら爲し得ざる憐然なる文盲漢にてありし、彼は當年十八歲まで曾て一回も學校の門を潛らざりければ、無論書く事も讀むことも爲し得ざりし、それも無理もなき事なり、彼は是迄毎日勞働に少くとも十二時間を費し、其餘の時間は機械部屋に居殘り、機械の片々を取集めて實地の學問を試むるに餘念なかりき、而して其餘の時間は身體の健康を保つが爲に安慰の遊戯を試みければ、書物の學問には寸暇もなかりし、然れども彼は將來の進歩上に學問の必要を感じ、今より專心學に就き從來の欠乏

ABC

實用の學問

無學を耻ぢず

勉勵の一端

を補はんと、十八歳の中年なるに耻ぢず、近邊の村學校に行き、六七歳の小童と共にABCを習ひ始めしが、彼の學問の進歩は速にして明けて十九歳には立派に彼自身の姓名を記するに至れり、それより算術、數學、應用理學、機械學等の實用の學問を學びて悉く成功せり。

ジョルヂ元來記憶に宜しく且つ理會力を有するが上に淡泊無邪氣の性質なれば一向に自身の無學なるを耻づる色なく、孜々營々學に志せり、彼が如何に刻苦精勵なりしかは、彼が炭坑に在りて器械を運用し作工を爲す間、食時に當り小息の暇あれば白灰の屑を以て石炭を運搬する車の傍に

進歩

移住

結婚

再び移住

數量の字を書きて練習したるを以て其一端を知り得べし。

二十歳の頃には「ブラック、コルレルトン」炭坑の機械方となりて最上の賃銀を得るに至り、千八百〇二年、二十二歳の時、ニューカス港に近き、ウエリントン埠頭に移住し、此處にて一家を構へ、其十二月二十八日フランニー、ヘンダーソンと呼べる女を迎えて家の妻となし、相變らず機械業に從事し、勞作の傍學問に餘念なかりき、其間勞作と學問の餘暇には履を繕ひ時計を掃除して生活を助け、此處に三年の月日を送り千八百〇四年假染ながら住み馴れしウエリントン埠頭を立去りてキルリンウヲルスに移りぬ。

スコットランドに出稼

歸宅

父の厄難

刻苦勉勵

此處にて妻を失ふの不幸に遭遇し、其後機械事業に雇はれてスコットランドに出稼し、一年間の勞働を終り、彼が一人の遺兒の居殘れるキルリウヲルスに立歸りぬ、彼はスコットランドより二十八磅の賃銀を貯蓄して持歸りしも、當時恰も彼が父の厄難に際したれば、悉く父を救助して剩す所なきに至り、此時彼が困難も殆ど其絶頂に達したりき、然れども

ジョルヂは百難不撓の精神を皷舞し刻苦物に當り勉勵事を濟し、彼は石炭坑に於て自ら長靴、靴、時計等を修作し、坑夫の妻の衣物すら裁縫したる事すらありき、而して彼は非常の勉勵を以て勞働辛苦し、其子ロベルトの教育に準備した

其名を知られし端緒

好境遇

りき、實にステフエンソンの如きは彼自身の管理の下に機械の應用を理會し、又彼の技倆を顯はすに多の機會を有したりと雖も、彼が始めて世に知られしは一個の機械を修繕したるにありし、斈は近隣の名ある機械師すら修繕し能はざる機械をば彼は見事に修繕し終りければ、此報酬十磅を得たるのみならず、石炭坑の機械師として招聘せられける。」

千八百十二年彼が三十二歳の時には機械製造家の位地に進み、始めて好運に向ひぬ、されば石炭坑に用ゆる凡ての機械は悉く彼の管轄の下に湊り、彼の思考の如くに變更改造せられて機械の上に一大進歩を遂げたり、夫よりステフエ

ソンソンは鐵道と行動機械を眼に注ぎ、百企百成の彼が活眼は早くも當時の機械よりは完全なる機械を製造し得らるべきを公言し、彼が所有の資産と他より財本を募集し、愈々

鐵道行動機械製造の着手

鐵道行動機械製造に着手し、幾多の勞働と苦慮とを經て全成せし機械は充分の成功を告げ、千八百十四年七月二十日

實施

其製造機械はキルリンウヲルス鐵道に實施せられたり、是れジョルヂ、ステフエンソンが公生活に入りし最初の日附なりける。

公生活といへども、其一地方の勳功なりき、當時其の地方の鐵道事業は馬力を用ゐ、ダーリントンよりストックトン迄

の鐵道施設中なりしが、鐵道事業家の連中には直ちにステフエンソンの行動機械を應用せんと議決したりしも、彼の行動機械たるや彼等が一時其効用を疑ひし程に大仕掛なりし、而して彼等事業家はステフエンソンに其行動機械を將來に於て用ゆべきを前約し、遂にステフエンソンをば年年三百磅の給料を約して機關師に雇ひ入れたり。

試運轉の好結果

鐵道の試運轉には驚くべき程の好結果を呈したり、然れども其の好結果なりしにも係はらず、行動機械に種々の妨害顯はれ、ストックトン及ダーリントン間の鐵道は矢張生馬を使用し續けたり、然れども終に蒸氣馬力は生馬力に打勝

鐵道事業の勝利

千磅の報酬

ロッケット

ち、ステフ、ヱンソンの行動機械の爲に鐵は贈られたり、蒸氣鐵道は擴がれり、烈しく鐵道事業に反對せし水道事業も茲に至りて遂に其本城を捨てゝ逃げ去りぬ。

千八百二十一年彼はリーバプール及マンチヱスター間の鐵道を敷も一年千磅の報酬を得たり、千八百二十九年種々なる困難に打勝ちて完全なる機械を案出したり、所謂「ロッケット」の行動機械なり(一時間三十五哩の速力)。

是より廣狹の鐵道線は蜘蛛の巣を營むが如く八方に擴張せられ、行動機械は十二分の完成を告げたり、實にステフヱンソンの名は鐵道と共に聯結せる不朽の名譽を擔ひ、鐵道

大なる名譽と大なる財産

雷名

成功の所以

平和的勳功

王の名と共に大なる名譽と財産を造れり、彼の名は常に鐵道事業の中にありて雷名全歐洲全米洲の上に轟きぬ。

彼は斯くまで輝きたる名譽は如何にして得たるか、問ふまでも彼は自ら助け自ら造りし結果なり、見よ、彼は一日僅に二「ペンス」の賃銀を得る牛番人より起りて大名譽大資産を博する位置に上りて國民の大立物となりしは、必竟多年の辛苦經營と勤勉努力に外ならず、ジョルヂ、ステフヱンソンの別莊に於て溘焉世を去りしも彼が平和的勳功は鐵道事業と共に無窮に傳照すべし、其一子ロベルトも亦父の業

を承けて有名なる機械師となれり、ヨルヂ、スチフヱンソンの全傳を詳悉せんと欲する人はスマイルスの"Story of teh life of George Stephenson"を見らるべし。

誕生

水道家

ゼームス、ブリンドレー

有名なる水道家ゼームス、ブリンドレーは千七百十六年(日本、享保九年)英國ダービシヱアのタンステッドに於て誕生せり、父は放蕩無賴の人にてありしかばゼームスの教育は愚か憐なる少年は身自ら日々のパンの價を得ずして叶はぬ事情に迫られ、幼時より近隣の農家に雇はれける。

日々のパン

水車場の見習生

其の十七歳の時には雇はれたる農家を去りて水車場の見習生として雇はれ、日夜孜々として勤めて倦まざりければ幾もなく機械の諸事に慣れ、其取扱方も追々詳密となりしかば、機械の損所修復等の技術は易々たる仕事となりき、彼が見習生を卒業したる時には、如何なる亂離骨敗を極めし機械も、雖も容易に修作し得る技倆となりしかば、其名漸く世上に聞えぬ。

炭山

當時ブリッヂウヲター公の所有地ウルスレー(マンチヱスター より七哩程)に無限無盡藏の炭山あり、石炭は津々として屠蠱を爲せども如何せん陸地の運送にては、マンチヱスター市場に於て石炭の利益を得る能はず、可性財寶を捨置くと

國會に請願

多數の反對

通過

同じ理なれば、千七百五十八年より千七百五十九年迄の英國國會議場に提出し、國利民福の爲にウルスレーよりマンチエスター間の運送水道を設けん事を請願せり、此時宛も公はブリンドレーが機械使用に高名なるを聞き、召して水道設置の圖案を引かしめ、之を國會に提出したれども、此事業の請願は議場に多數の反對者を有したりければ、其通過の見込甚だ覺束なかりき。

然れども國會に於て其請願を通過せり、水道開設は許されたり、さてブリンドレーは直ちに此事業に着手せざるべからず。

着手

救助

空中樓閣

穿道は穿たれ始めたり、大なる土堤は築かれ始めたり、高五十「フィート」の三大橋梁(アイウエル河を越えて)は起り始めたり、然れども彼は彼自身すら此の着手の不安全なるを慮りブリンドウヲター公に他の機械師を呼びて種々の相談を爲さんと請ひたりければ、公は直ちに機械學士某をブリンドレーに送られたり、ブリンドレーは學士某に此事業の目論見を語り、「余は是迄屢〻空中樓閣の事を聞きしも實際之を建設したるものを聞かざりしに、余は此度斯の如き建設にかゝりたり」と。

ブリンドレーの計畫と實行は始まりぬ、幾多の苦慮と勤勉

の後ウルスレー運河は速に成功の途に就きたり、出來難く心配せし水道は十二月間を費して全成したり、ブリンドレーの勝利は一大機械師として全國に名聲を博し、水道は英國の一大道路となれり、開切、隧道、水閘、溝渠悉く成功を告げ、忽にしてグランド、ツランク、バーミンハム、ヲエスターフィルド及其他の水道事業は全成したり。

獨修

彼は實に獨修の技術を以て此大事業を企て且つ全成したり、彼は普通の機械業に就きて一の知る處なし、況んやかゝる大事業に就てや、彼は一の模型と一の圖案を有せざるも、唯彼が熱誠なる頭腦より湧出せる考察と工夫より此驚く

べき成功を遂げたるなりし、彼は事務を以て一生を終りぬ、彼が生涯の間には種々なる機械發明を爲して世を益せしことを尠からざりしも今は彼が組織は廢せられたり、ブリンドレー千七百七十二年(安永元年)九月三十日、五十六齢を以て世界を去りぬ。

彼の性質は温和謙恭、彼の生涯は水道事業に費されたり、而して水道事業の成功の曉となるや凡ての他の機械事業よりも高位地に進められ、彼も亦水道事業に伴へる不朽の名譽を殘しぬ。

紡績王

リチヤアド、アークライト

ブレストンの理髪師

英國ブレストンに有名なる理髪師ありけり、彼は髯を剃り髪を刈るに妙技を得たりしのみならず、聰明にして實着なる人物なりき、而して彼は機械發明の事に熱狂せし人物なりき、而して彼は有名なる自達の人物なりき。

呱々の聲

彼はリチヤード、アークライトと呼び千七百三十二年(日本享保十七年)十二月二十三日、英國ランカシア、ブレストンに於て呱々の聲を擧げたりけり。

刀自學校

生家甚だ貧窮にして十三人の兄弟ある中にてアークライトは其末弟なり、かゝるが故に彼は教育を受くることも得ならず漸く近邊の刀自學校に就き少許の學問の道に入る

理髪業

を得たれど、僅に商賈を爲すに差支なき丈の智識を得たるまでにて深き程度に進むことを得ざりき、されば彼は少年の頃より理髪の商賈を始め、或年ブレストンの或巷の土窖室に住み、土窖室の上には青と白とを以て彩りたる棒の頭に薄板をくゝりつけ、刈込と髯剃の看板を出して客を引き、長き砥革に剃刀を研ぎすまし、熱き湯と石鹸を準備して來客を待てども客は一人も來らざりければ、アークライトは或夜土窖内の低き寢床の上に打倒れ、種々に商賈の道を考へしが、何か面白き工夫の浮ひしにやニコリと微笑みて其夜は其まゝ打臥しぬ。

土窖室の理髪店

其翌日彼は早朝より店頭に面白き廣告を掲げぬ、其廣告の趣は「地下の理髪店に來れ髯剃一「ペンニー」(Come to the Subterraneous! He Shaves for a Penny!)となり、當時世間並の髯剃料は二「ペンス」なりしかば、通行人は此廣告を見て土産の理髪店に降り來るもの陸續として絶間なく、忽ちアトクライトの店は繁昌の神舞ひ込み、意外の大當を取り始めたり、他の同業者も此有樣を見て彼と競爭せんと同じく髯剃料を一「ペンニー」に引下げたれば、アトクライトは此度は半「ペンニー」に引下げ敵と立合しが、敵は遂に之に打負け、土産の理髪店は獨り益々繁昌の幸運を得たりき。

斯の如くしてアトクライトは三十歳に至るまで此家業に從事し毎日刈り散せし毛髪を集め又は諸方を歩き廻りて毛髪を買ひ集め、之を假髪師に賣りて渡世となし、其後白髪染の新法を工夫して專賣特許を得たりしも假髪の風俗次第に衰頽に歸せしかば、此度は紡績機を發明せんと工夫鍛錬を費せども從來機械業に從事せざりしかばウエリントンの時計師に此事を相談し、愈々此發明を試みんと企てける。

さて是迄の紡績業は人々の手頭にて綿より糸に紡ぐ位にて、此儘にては迚も紡績業の進歩思も依らず、アトクライト

以前の紡績機械

赤貧洗ふが如し

は此不自由不進歩を嘗はんには是非とも一個の機械を要するを感じ、如何にしても紡績機械を發明せん事を決定せり、勿論是迄紡績機械なかりしにはあらず、ヤット氏は此目的を以て一機械を發明したりしも世に用ゐられずして止みぬ、アークライトは其稍完全なる機械を發明したりしも、貧民の「パン」を奪ふ惡魔なりとて、彼等貧民に強迫せられ、機械は徒しく破滅に歸したり

然れども紡績機械は是非共必要なり、アークライトと其友人は此發明に着手せんと思へども、如何せん第一資本に困難なり

アークライトは赤貧洗ふが如き寒措大なれば資

始めて資本を得

本は措き日用の衣物すら着る能はず、機械發明相談の爲め彼を發明人に撰ばれたる連中を訪ひし時は、葡萄酒商スモレットを説服して漸く衣服一揃を調へし仕義なり、而してスモレットは遂に資本を御して アークライトとキーをして機械發明に着手せしめたりければ、二人の喜悦一方ならず、アークライトは是迄諸方を探求し、諸製造家に就きて工夫したる機械の模型を造り出しぬ、これ有名なる「スピニング、フレーム」の紡績機械なり、此機械は政府の專賣特許を得たりしも其後千七百八十五年、同業者より專賣侵害の訟訴を提起せられ、遂に「キングスベンチ」の審院に於てアークライトは

目的貫徹

敗北の裁判を受け、紡績機械は廢止せられたれども、千七百九十年ノッチンハムにて更に完全なる機械に蒸氣力を用ゐ、大に製綿所を設け、莫大の利益を得たりける(但し以前は馬力を用ゐたり)。

位爵を賜はる

アークライトは機械發明以來富有の身となり、時の英王ジョルヂ三世より「ナイト」の位爵を賜り、英國綿布の商權と最要なる英國製造業は全く彼の手に落ち、千七百九十二年には五十萬の財産を遺して安眠するに至りぬ。

五十萬の遺産

嗚呼、アークライトは元是れ一個のプレストンの理髮師なり、而して斯くまでの位地と資産を得るに至りしは必竟彼

自ら造る精神

が自ら造る精神より起る熱心と固執の結果たらずんばあらず、彼が一生の來歷を見るに貧にして教育なく且つ最も下賤の身分よりして唯だ熱心と固執との二道により、漸次に歩武を進めて位地、勢力を攫み、憐むべき一個土窖中の理髮師も今や有名なる大製造家となりて歷史上に足跡を止めき、彼は何事にも上手なりし、理髮師としては理髮の手際上手にして、評判の毛髮賣としては英國の假髮師の間に知られ、白髮染も發明機械も最も善美にして最も完全なりき、彼は何事にも全心と全力を籠めたり、此結果こそ、やがて大英國紡績王として世界の上に輝きたりし。

熱心と固執

何事にも上手

全心と全力

リンドセー

商品

富豪家

リンドセー

自ら造りし人の中にて大富豪となりし人尠からず、其人々は始め數「ペンス」を以て生活の道に出立し、後に巨萬の財産を造りぬ、其例數多あるべけれども茲にはリンドセーの傳を叙すべし。

リンドセーは英國商業界の一人なり、ダルトマウスに於て二十二艘の上等船舶を所持し、保險人としては二百八十萬磅の保險料を約束し、一年中に世界各港に七百艘の船舶を出し、十八萬噸の石炭、十五萬噸の鐵、百二十萬「クオリタル」(一「クオリタル」は我三貫三百八十八匁七分に當る)の穀物を輸

昔は無宿涙人

誕生

自立の精神

出す、是等の物貨はリンドセーの重なる商品なりし、彼は斯くまで富有の身となりたりしも、其昔は憐むべき無宿の流涙人にして喰ふべき食物もなく、リーヴァプールの市場の小屋に蹲りて辛ふじて露命を繋ぎしことさへありき。彼は如何なる方法によりて其富を造りしか、卒や其道筋を語らん。

リンドセーは一千八百十六年(日本文化十三年)を以て蘇國エールに誕生せり、六歳にして孤兒となり叔父に養はれ、叔父の手にて教育せられけれども、リンドセーは自立の精神は勃々として禁ずる能はず、彼が志す處は實に航海事業に

あり、船乗を以て身を立てんと思へども、如何せん頼むべき友人も資本もなし、唯だ彼が一個の委頼とすべきは、此目的を達する爲に心身の勤勉なり、彼は勤勉の資本を以て物事に當らんと僅に二三「シルリング」の小錢を「ポッケット」に入れ、世界の生活の大道に立ち出でけるぞ健氣なり先英國第一市場なるリーヴァプールに赴き蒸氣船の石炭倉に石炭を積む運夫に雇はれ、幾週間か眞黑となりて石炭を運送しけるが、此仕事は彼が志す將來の商業上に面白き道程にもあらず、且つ其所には一の知友なく尚ほ貧困を極めてありければ斷然此仕事を止め、他に好き事業もがなと八方に眼

を配り居る中、金錢は盡き果て飢餓は眼前に迫り來りぬ、リンドセーは貧困憂苦にくるしめられ、諸々方々にさまよひ、或は小屋の下に住み或は木の蔭に眠り、流轉漂浪實に見る影もなき有樣に陷り、將來の見込も殆ど絶え果てたり、然れども彼は能く時を待つ事と働くべき事とを知れり、世には極貧より起りて富豪家となりしもの尠しとせず、彼は斯の如く爲し得るか、然り、勇敢なるリンドセーは他人の爲し得る事は必らず爲し得るなり、見よリーヴァプール船渠には黑體尖檣の大艦ありて、彼が希望と成功を待つあるを。

遂にリンドセーは給仕(ボイ)として大艦「イサベラ」艦に乘込みぬ、

勤勉の結果

破船と負傷

然れども當時に在ては給仕と名けらるゝも半ば働力者にして今日の給仕の如く安樂なるにはあらざりき、リンドセーは「イサベラ」號の甲板に於て烈しき勞作を爲しけるも、聊も失望逡巡の色なく、これによりて其目的を達せんと勇氣凛々として當るべからざりき。

勤勉は成功の第一手段なり、三年の後、彼が勤勉勞作の結果は第二副艦長の位地に擧げられたり、これぞ彼が眞目的に向ひし第一初歩なりける。彼はこれより生活の梯子に登り始めけるに、副艦長となりてより數個月を經、不幸にも「イサベラ」號は破船の難に遇ひ、彼は兩脚と一腕を傷き辛ふじて

一命を拾ひぬ、彼は再び不幸の人となりたれども運命の女神は尙ほ彼に向ひて微笑を呈し、彼は千八百三十六年(天保七年)恰かも二十歳の時「オライブ、ブランチ」號の艦長に擧げらる、艦長となりて諸國諸港に航海すること三四年、千八百三十九年(天保十年)ペルシヤ灣に於て敵賊に侵擊せられ一場の戰端を開き、艦長リンドセーは敵の劍に切り倒されしも、敵は艦長の「ピストル」に射斃されたり。

艦長リンドセーの生命には別條なかりし、然れども彼は思ふ仔細ありて其翌年艦長の職を辭し「カストル、エデン」石炭會社の管理人として「ハートブル」に住居を構へ、此處にて

彼の位地

成功

最後の運命を定めんと試みたり、成功は彼が轉歩の間に落ち來れり、彼は恰も此航海國(英國)に最上最善なる商船に雇はれて其船長となりたり。

彼は烈しく勞作し烈しく學問し、兼ねては自ら工夫創作する事を勉めしかば、之によりて種々なる新智識を得たり、千八百四十五年(弘化二年)彼が三十歳の時、ロンドン市に移住せし頃には、大船の船主及船の牙保となり、商品雜誌の記者となり、國會議員の候補者となれり、彼はロンドン第一等の市民たるを願ふのみならず、航海事業の帝王となり、國會議院内の勇將たらんと希望したり、凡ての希望は成功せられ、

工夫創作

至言

彼は國會議員となりて國會議場に立ち顯はれ、只管國利民福を計り、航海事業に於て少なからざる利益を國民に頒ち、而して彼の一生は勇氣を以て工夫創作に充されたり、彼が一度必らず成功すべしと決したるものは必らず之を貫徹したりき、而して彼が爲したる事は他人にも爲し得らるるなり、語に言はずや、人に依りて爲し能ふ事は人に依て爲し得らる、神は自ら助くるものを助くるとは誠に至言ならずや。

牧羊詩人　ゼーム、ス、ホッグ

次に記すべき世界に有名なる自立獨行者は蘇國エットリ

ックの牧羊者の傳記なり、彼は如何なる人なりしか、彼は怜悧にして誠實なる容貌を備え、秀でたる眉目と締りたる口元には一種の風采あり半霜幾莖の頭髮は鬢邊より起りて後に垂るゝ人物こそ、これぞスコットランドの牧羊詩人ゼームス、ホッグとは知らるゝなり。

ホッグは千七百七十二年(安永元年)一月二十五日、奇異なるエットリックの一小村落、田舍寺院の境内の山小屋の内に呱々の聲を擧げたり、彼が兄弟は四人あり、ホッグは其第二子なり、彼は母なる人の熱誠の性と音樂等を好む優美の心を受け、幼き時には谷間に咲き出づる雛菊の中に遊び戯れ、

或は谿間をちよろ〳〵と流れ走る小川に添ひて崩え出づる黃菊を集めつゝ、古き昔時に遡り、此國の英傑が爲せし功績を記せる勇しき詩歌を吟しつゝ、最も柔に若葉の歲月を送りける。

ホッグ七歲にして其地の寺院學校に入り止ること數月、彼は學術の進歩著しくソロモンの古諺を讀み、或はスコットランドの學校に用ある教科書の全般に通曉したりし頃、俄然不幸の運命は彼の頭上に落ち來り、據なく學校を退學することゝはなりぬ、不幸とは彼の父、フト投機業を試み大失敗して一家衰頽に歸せしかば、此少年は自ら糊口すべく世

助くる神もあり

再び學校に入る

界の活戰場に立ち出でたり。

然るに恰も好し隣村の一紳士ホッグの家の急變失落を憐み、地所若干をロバート、ホッグ(ゼームスの父)に貸與して牧場に當てしめたりければ、ホッグの一家は漸く安堵の思を爲しゼームスは再び家に歸り、近邊の農家の子弟を教授するカーと呼ぶ少年が監督せる學校に上りたり、此少年の監督の下にて速に聖書を熟習するを得、習字の稽古を始めかりし折も折、彼は再び此處を去らざるべからざる事情に迫られ、又もや生活の世界に立ち出でける。

此時に當りては野に於ける穀物を保護すべき垣墻すらなかりければ、蘇國の低地の農夫等は夏季の間牝牛を牧ふ少年を要せしかば、ホッグは退校後直ちに牧牛者として一農夫に雇はれたり、而して當時ホッグの境遇は、後來詩界の明星となりて芳名を懸揚する端緒とも見えざりけり。

牧牛者

牛を牧ひつゝホッグは此處に幾歳月を送り追々牧羊の助手位には適當なる人物となり、十五歳の時には十二人の主人に使役せられけれども、彼は餘り牧羊の事を好まぬ所よりエリベンク、アボン、ツウイードの一農夫に雇はれて牧羊者とはなりにけり、此時は早やホッグは牧羊者の位置に進みぬれば、彼は常に小山などの高地に坐を占め、敎え易き動

牧羊者となる

物(羊)を監視し、彼が犬も亦長き夏の間、主人なるホッグに代りて多くの羊群を督しけり。

大なる便利

其後ホッグはウ井リアム、レイドラウと呼ぶ人に雇はれ住をブラックホウスに移りぬ、此處にて大なる便利を得たるといふは、今まで職業の爲に等閑に附せし彼が幼時の教育を回復することにてありし、主人レイドラウは親切なる上に多才の人にてホッグに其家に藏めある書籍は自在に閲覽する事を許したり、此機會こそホッグに取りては無上の幸福にてありしかば、

十年間の發奮

十年間の長日月此處に止りて平和靜穩の生活を送りぬ、而して彼は最も書籍と親めり。

詩想の發動

ホッグは此平和靜穩の日月を送り、晝間は牧羊、夜間は音樂、舞蹈を試み、或は古代の長歌を謠ひ且つ最も巧に提琴を彈くことを學びき此間彼は一二の定時刊行物を發行して其志を世に示し辛ふじて思想の感動を抑えたりき。

文學會

吟歌、提琴、舞蹈、遊樂、これすら未だ全く此牧羊詩人の本望を滿足せしむることを能はざりければ、彼は文學會を創立し、會員は各々課題によりて論説を書くべき事を定めしも、其多くは記憶すべき程の價値なく、唯彼は其述作に係る「ラッシース、フリッチング」(Luys Flitting)の單歌の著者として知られたり。

自然の光景

詩人の境遇

時は千七百九十四年一月二十四日の夕、雪は切々と降り頻り滿天滿地白皚々、膚を劈く嵐さへ加はりて最と物凄き夜。なるに、彼は此風雪を冒して其家より二十英哩隔つる寂寞たる小舍に開かるべき文學會に赴く道すがら吹きすさむ嵐や、舞ひ落つる雪や、かゝる自然の光景は忽ち彼の眼光に映じて最好の詩料となり、軈がて「セーフアード、カレンダー(Shepherd's Calerder)の妙調となりて此詩人の口に發しぬ。

ホッグは斯の如く田舍の生活を爲し、殆ど詩人たるべき涵養を怠るが如きも、彼は常に詩人の境遇に逍遙したりき、見よ、山も、谷も、平原も、低地も、日光も、暴風も凡て詩人たる彼の

眞實の詩學校

教師なり、而して彼の心には常に高、美、奇、嚴の詩想脈々として動きぬ、彼は浮世の音喧しき都の生活を辭して田舍に退隱し、眞實の詩學校(田舍)に在りて、上帝の造り玉ひし自然の美を感收して詩想を練磨したりき、實にや田舍は自然の詩學校なり、見よ、人若し此處に安居して書を讀むに、たとへ咿唔絶ゆるも其周圍には、何時も上帝の手細工物と萬物の生命ありて詩人の教師たるべきを、彼は實にかゝる境遇に居りて充分に詩想を養ひ、夫の「嵐の辭」を意味する「ゼー、クインス、ウエキー」の詩篇は此境遇中の作なり、其他「ゼー、ムーン、エ、ウエニング」の如きも、此境遇中に逍遙し彼が最愛の小羊が

積雪中に埋りて凍死せしを慟哭し、モフワットの寺院に埋葬せる時に歌ひし哀歌なりし。

千八百一年、彼は「ウィルリー、エッド、ケーチー」なる一篇を世に公にせしが著者が遜辭あるに係はらず廣く一般に用ゐられたり、次年牧羊者なるホッグは當世の大家サー、ウヲルター、スコットの知己となれり、ホッグはスコットの性情單純にして自然なるを嘆美し、深き交を結ぶに至りぬ。

斯の如くにしてホッグは詩神修錬に餘念なき折柄、彼は再び乾燥なる眞實の生活に入らざるべからざる事情起れり、乎は彼の兩親の住居するエットリックの田地を失ひしか

ば、大なる痛心を彼に與へしかども、其隣人の恩惠によりて新に田地を借受けられたり、此間に於ても彼の文學思想は更に休する處なく、羊の飼養及其監督につき一論文を草して「ハイランド、ソサイチー」より二個の褒賞を得、夫より彼はハイランドに三回の旅行を爲せり、其二回は徒歩し、其一回は馬上に於て。

旅行を終りて後深く此地を愛し、今は斷然エットリックの故郷より遠く隔りたるハルリス島に住居を定め、此處にスデールの一紳士に雇はれ相變らず賤しき牧羊の業を營みけるを、彼の腦中には詩神興來して分時も休する處を知

らず、此間に於て「マウンテン、バード」(山中詩人)を出版して、牧羊の賃銀を合せ三百磅を得たり、然れども彼は三百磅に滿足する能はず、投機業に手を出せしに、忽ち一敗地に塗れ如何ともすべきやうなきに至りしかば、彼は又もや牧羊者の業に復しぬ、併しながら輕薄なる世の人情は恰も手掌を反すが如く彼の貧乏に急落したるを見て、忽ち顏を反向け昨日まで彼の金錢を借り彼の酒を嘗めし朋友も、今は彼が作詩すら吟するものなきに至りぬ。

彼は世の冷遇を事ともせず、倍々文學の趣味を發揮せんとそれよりエデンボローに行き、多くの朋友を得たりしも一

片の金錢は得ざりき、彼は此處にて「フチレスト、ミンスツレル」の一篇を公にしたれども、啻に一「ペンニー」の利益を得ざるのみならず、多くもあらぬ彼が懷中の資金を蕩盡せり、此時彼は「プチリエル」と呼べる政論會の書記(一年二十磅)に雇はれしも曾て其給料は拂はれざりき。

此時に當り英國詩界の明星バイロン、及スコットは中天に赫々たる光輝を放てり、ホッグは此間に立ちて或人に勸められ「ゼー、クインス、ウエーキ」の詩篇を上梓し、意外に世人の喝采を博し、三版を重ぬるに至りしも、二人の出版人の間に紛擾起り、一人の破產せし爲め、ホッグは一錢も其報酬を受

けられざりき。然れども彼は此時よりして國民の愛顧を受け始めて文學社會に籍を置き名聲漸く世上に知られぬ、嗚呼彼は一介の牧牛者より起り今や賢良にして才識ある愛讀者と善良英俊なる朋友を有するに至りしは寧ろ奇ならずや。

成功の詩人

是より彼は成功したる詩人としてロンドンに住居を定めぬ、彼はロンドン府民より一方ならぬ尊敬と注意を以て歡迎せられけり、ロンドン住居の間、彼は魚鳥市場に行き雲雀の死骸を見ては同情の漫歌を作し、其他種々なる著作を公にせり、其後鄉國スコットランドに歸り、千八百三十二年の

春、「アルトライブ、テール」の第一卷を發行したりしが、發行人の都合によりて之を絶版したり、然れどもホッグは世の不運と不幸とによりて少しも心を傷めず世上の憂苦何物か關するなかりけり、其年ロンドンに歸りしが、其朋友及國民に歡待せられ、常に公餐に列する名譽を得、多くの尊敬は彼が身邊に湊りぬ、彼は曾て山林の安靜と市井の喧囂の間に名譽を求めしが、今や彼の周邊には才識ある紳士を以て滿されけり。

夫より二年間彼は安樂に生活を送りしと雖も、甚しく身體の不健康を來し、千八百三十五年(天保六年)十一月二十一日、

地球は此牧羊詩人の最後の音響を納めき。

彼は六十三歳を以て溘焉永眠に就きぬ、其遺骸は鄉國スコットランドのエットリックに送られ、詩人が曾て朝も夕も愛慕せし故鄉の土墳の上には、一基の石碑靜に横りぬ、其面に、

碑文

"Flow on, my Ettrick! it was thee
Into life that first did drap me.
Thee ill sing, and when I see
Thou wilt lend a sod to nap me.
Pausing swains will say, and weep,
Here our shepherd lies asleep!"

これ牧羊詩人ホッグが曾て吟誦せし故鄉を懷ふの詩なり、今や此詩は彼自身の碑面を飾る碣文となりしも亦奇ならずや。

三菱社長　岩崎彌太郎

故岩崎彌太郎が三菱社長として我國に雷名を轟かし、全國の航海權を掌握し、以て日本第一の金權を把持するに至りしは何人も能く知る所なり、彼は如何にして斯くの如くなりしか。

彼も始より今日の如く莫大なる金權を掌握せしにあらず、彼は天保五年土佐國安藝郡井の口村に生れ、安政五年江戸

に遊び安積艮齋の塾に入りて東山と號する時、安政六年彼が父彌三郎村吏と事を爭ひ、爲に誣られて獄に繫がれし報に接し、急速將に國に歸らんとするや、貧窮の寒措大、元より嚢中餘資の備なく、止むを得ず心を決し途すがら他人に食を乞ひつゝ晝夜兼行辛ふじて鄕里へ歸り奮激大に村吏と曲直を爭ひ父の寃を雪がんとしたる事實あるを以て、其壯年時代の貧窮を察すべし。

而して彼は郡奉行の忌む所となり、城下傍近に在住するを禁せられ、家を神田村に移して閑居したりしと雖も果敢有爲の氣象は毫も消磨せられず、窃かに當代の名士坂本龍馬、

後藤象次郎等と親交を結びぬ、幸なるかな彼の人物藩主山内容堂の知る所となり、藩命を奉し長崎に赴きて外國人の人情風俗を察し、且つ佐賀の名士大隈重信、江藤新平等と交る、これ彼等が位地を進むるの最初の一大階段なりき。

それより彼は藩主の信任を受け開成館の吏となり、勸業の事務を司りしが、處理裁決毫も滯を見ざりければ、益々其位地を進め、慶應三年には長崎通商事務を擔當し、土佐の物産を販賣して大に國帑の收入を增加せしめ、尋で召還せられ小參事に任じ大阪留守居職を命ぜられ、會計の局を兼ねたり、彼は此任務にありて大に事務の技倆を奮ひぬ、其時

は恰も王政維新の事變に際し國内多事にして財用給せず、各藩大抵困難の場合に迫りしと雖も、彼が藩のみは彼の力によりて幸に措置施設宜しきを得たり。

而して彼が一生の大事業は、實に海上の事業にてありき、海國人たる日本人をして今日の如く海事思想を起さしめ、我國が僅々廿餘年間に於て著しく海上事業の發達を致したるは、これ蓋し岩崎彌太郎の功に居るもの多かるべし、彼は幼年の頃より遊戯の内にも海濱に出でゝ商船漁舟の東西往來するを望見し、また海洋の廣袤際涯なきを見ては、船を此間に浮べて縱横の策を施すは海洋航行にありと、此時より常に意を海上に注ぎ、其の遊び戯るゝにも木片を海に浮べて船舶に擬し、他の童群を集めて操舟の態を爲したるといふ、以て異日の志を見るべし、彼が長崎に在りて藩の貿易事務を取扱ふや、其間貿易の販路を擴張せんと欲し、先づ朝鮮に渡航し蔚陵島に至り紀念のために木標を建て『大日本國岩崎彌太郎奉藩命發見本島』と何ぞ其志の雄偉なるや。

維新の初年、彼は從來藩用のために備えたる蒸瀛船數船を以て、九十九商會なる運送會社を創立し、無事大平の日には公衆の航漕運輸の便に供し、一旦事あるの日に於ては、將に藩用たらんことを期したり、これ彼が海上事業に大成功を

遂げたる第一着歩なり、明治四年廢藩置縣に遭遇し、九十九商會を解散して船舶を藩主へ還し、更に私費を以て從來藩用の漕船數隻を拂ひ下げ、私立の漕船運漕會社を創立し三菱會社と名けぬ、當時未だ期を定め度を定めて我國沿海を航行する漕船なく、僅に此三菱會社あるのみなりければ、政府は之を便利とし郵便運送の事を托せしかば、全國沿海の航漕權は全く彼の手裏に落ち、則ち郵便漕船三菱會社は朝暾の昇るが如き勢なりし。

困難と妨害

然れども三菱會社則ち現今の日本郵船會社が、今日の勢大に至りしまでには種々なる困難と妨害とに遭遇せしかど、

岩崎が果敢の氣象と耐忍力とによりて最後の勝利を得たり、明治六年佐賀の亂にも臺灣征討にも同會社は政府のために軍事回漕の任務を終り、政府の信任を受くること益々厚きの位地に進み、更に航路を清國上海に擴張するに當り、一强敵眼前に顯はれたり、これ乃ち太平洋漕船會社なり、彼の會社は船舶及實力の充滿せる威勢を以て、我沿海に船舶を派し、三菱社の航路を奪はんとす、三菱社は奮起して此强敵と競爭を企て、之に打ち勝たんが爲に旅客及貨物の運賃を低下し、船客の待遇を厚くし、航海の度數を增加し、また進航の速力を增し大に敵と競爭せしが、勝利は終に三菱社の

更に一強敵

清國招商局の汽船

手に歸したり、然れども明治九年には夫の有名なる英國の濠船會社ピーチー會社なる一強敵を生じ、我近海に船舶を送り支店を横濱港に設け、激烈なる競爭を始めたり、然れども三菱社長岩崎彌太郎は不撓不屈の精神を以て首尾克之に打勝ち、さしも剛慢なるピーチー會社をして遂に全く其船舶の痕を我近海に絶ちしに至りしは、義俠なる我國民が三菱會社をして彼に打勝しめんと欲し、彼に委頼せずして此に委頼したるもの多しと雖も、岩崎が苦心と耐忍力とに依らずんばあらず、これより三菱會社は我國の航海權を一手に掌握し其基礎を鞏固ならしめたり、西南役後清國招商

世上の攻撃

局の濠船と競爭を始めしも、暫時にして彼を近海より驅逐しでより外國船舶の絶て三菱社と競爭を試みるものなく、茲に於て大日本の航海權は全く三菱の掌中に歸したり。

彌太郎は此全盛の期に於て功名を明治の歴史に殘し、明治十七年六月病によりて東京に歿す、息久彌巨萬富豪の家を襲ひ其富刻一刻と增殖し其業日一日に盛大なり、時に世上三菱社航海權獨占の弊害を唱へ、政府は優渥なる保護を與へて別に共同運輸會社なるものを創立し三菱社と自由に反抗せしめ、激烈の運動競爭せしめたるも運輸會社は其不利なるを悟り、終に三菱共同兩社を合併し、現今の日本郵船

會社を起さしめたり、此事は彌太郎の死後に屬す。

政府は岩崎彌太郎を從五位に叙せり、これ彌太郎が明治政府に勳功あること多かればなり、彼は明治六年の佐賀の役及台灣征討、明治十年西南の役に於て、悉く其船舶を戰用とし、兵馬、軍器、兵糧を運びて毫も遲滯なからしめ、政府をして首尾克戰勝の目的を達せしめるの功少々たらず、これ以て勳四等を授けられたる所以なり。

吾人は岩崎彌太郎が傳記の概略の最も概略を記したり、要するに彼が斯くの如く有名なる人となり、日本第一の金豪たるに至りしは、第一の資本は辛抱力強くして如何なる困

難にも打勝ちし、能く時世に通じ機を見て能く働き動きて貫徹せざるなき精神に居るもの多く、彼が社長となりては人を見て能く任じ、任じて疑はず、人をつかひ利を分つや、公平無私を主義としたるは今日の大を爲したる所以か彼も亦近時の人傑なるかな。

事務世界

終

明治二十八年十一月廿六日印刷
明治二十八年十一月廿九日發行
（定價金十錢）

發行者　東京市京橋區日吉町四番地　垣田純朗
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　高田乙三
發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

版權所有

◎民友社出版書籍目錄◎

社會叢書

每月一卷出版
一冊讀切
十二編完結

現今日本の社會は、頗る有望、多端、煩雜を極めり、上中下層社會、學問社會、商業社會、勞働社會、技藝社會、娛樂社會、其他種々の社會の現狀、組織、生活の有樣は如何、其狀況をして或は之を獎勵し或は之を評論し、或は之を革新し以て眞率、着實、精勵、有望なる社會となし、其社會に立つべき人物を養成し、國家の基礎を形つくるは編者の急務とする所にして社會叢書は有益的、進步的、平民的、實行的を主とすれば何人にても實踐實行し得、且つ事實の點より議論を超し斷定を行ふは決して空想浮薄の趣なからんとを期し、其文意交體は及ぶだけ簡明平易を旨とすれば、必らず婦人少年にても難澁の患なからんことを期し、又其範圍も少年、青年、婦人、男子、其他凡ての社會を通じ、新智識、新職業、新生活の案內又は相談相手たるを期す、其主義、目的、文章斯の如し、今や日本か世界に向つて大膨脹を開ける發端に於て此書を發行す其間大に理由なくんばあらざる也

而して其既刊目錄如左

○第一卷 海の日本人 定價十二錢 郵稅二錢 定價十二錢 郵稅二錢

○第二卷 簡易生活部 定價十二錢 郵稅二錢 定價十二錢 郵稅二錢

○第三卷 娯樂倶楽部 定價十二錢 郵稅二錢 定價十二錢 郵稅二錢

○第四卷 事務世界 定價十二錢 郵稅二錢 定價十二錢 郵稅二錢

青年叢書

全部二十卷

毎月出版

身高峰に起つ眼千里の觀なからんや。新勝は國運を急變し而して國勢の進轉は國民の資格と伴はざるべからず、國民の資格を高くするの道果して如何、運勝國は太陸大洋の主人なり、一大故郷を造るの道果して如何。癒ゆべからざる鐵創を頑清に加へ、新興國として世界の嫉妬と畏懼の中心に立てる大日本は武裝せるスパルタに非らずや。國運は新組織を要す。完美なる國民は完美なる個人也、樹を植て一家十年の計を爲す者一國百年の長計は人を造るに在るを忘るべけん乎、武育的國民にして高美的市民、職務を知り技術を有せる人、一代の人にして世界の人を造るは一等國の國是、今日の急務也、大なる日本人を造るは大なる日本國を形る唯一の道に非らずや。新人物は新事業を產み、新事業は新國運を開く。學窓の下、西天の一方に睥睨し雄心壯圖を抱く新國民たらんとする人よ「青年叢書」を讀め。

○青年叢書第一卷 武育征論

○青年叢書第二卷 遠藤民術

○青年叢書號外 本國論

○青年叢書第三卷 市村術

○青年叢書第四卷 職校

○青年叢書第五卷 朝日技術

○青年叢書第六卷 美學校

「青年叢書」第七卷以下目次は如左

●第七卷 傳記 實踐道德

●第八卷 時世 遊

●第九卷

○家庭叢書第一卷 **家庭の和**

○家庭叢書第二卷 **夏と遊**

○家庭叢書第三卷 **玩具の教養**

○家庭叢書第四卷 **小兒の衛生**

○家庭叢書第五卷 **家庭の整理**

○家庭叢書第六卷 **家庭の整理**

○家庭叢書第七卷 **簡易料理**

○家庭叢書第八卷 **家庭の遊戯**

○家庭叢書外 **家庭の樂**

○婦人叢書第一卷 **社交と家庭**

○婦人叢書第二卷 **婦人と職業**

○婦人叢書第三卷 **婦人と職業**

○婦人叢書第四卷 **婦人と職業**

○婦人叢書第五卷 **婦人と職業**

○婦人叢書外 **婦人と職業**

○家庭叢書外 **名士と家庭**

○平民叢書第一卷 **十九世紀の大變動**

○平民叢書第二卷 **世界經濟史**

○平民叢書第三卷 **國家と政府**

○平民叢書第四卷 **教育と遺傳**

○平民叢書第五卷 **文明と救治**

○平民叢書第六卷 **現代の弊害及其救治**

定價十二錢 郵稅二錢

定價十二錢 郵稅二錢

○平民叢書第七卷 **經濟と道德** 郵稅十二錢 定價十二錢

○平民叢書第八卷 **歷史攻究法** 郵稅十二錢 定價十二錢

○平民叢書第九卷 **哲學變遷史** 郵稅十二錢 定價十二錢

○平民叢書第十卷 **白人種の前途** 郵稅十二錢 定價十二錢

○平民叢書號外 **銀貨之過去現在未來** 郵稅二十錢 定價二十錢

○平民叢書號外 **責任內閣** 郵稅二十錢 定價二十錢

○德富猪一郎著 **大日本膨脹論** 郵稅二十錢 定價二十錢

○竹越與三郎著 **支那臺灣論** 郵稅二十錢 定價二十錢

○**日清戰記** 前編 郵稅十四錢 定價十五錢

○**日清戰記** 後編 郵稅十四錢 定價十五錢

○**日清戰記** 續編 郵稅十四錢 定價十五錢

○**征清壯烈談** 郵稅二十二錢 定價二十三錢

○**第一軍壯烈談** 郵稅二十二錢 定價二十三錢

○**第二軍壯烈談** 郵稅二十二錢 定價二十三錢

○**第三軍壯烈談** 郵稅二十二錢 定價二十三錢

○**第四軍壯烈談** 郵稅二十二錢 定價二十三錢

○**第五軍壯烈談** 郵稅二十二錢 定價二十三錢

○**日清戰爭** 郵稅二十二錢 定價二十三錢

○**日清戰爭** 郵稅二十二錢 定價二十三錢

○**日清戰爭** 郵稅二十二錢 定價二十三錢

○歌軍**支那**

德富猪一郎 深井英五合著

○**歐洲大勢三論**

通譯官股野保和編纂

○**臺灣語集**

郵稅二十六錢 定價十四錢

○平田久著 第一文豪卷 **ナイル** 定價十八錢 郵稅四錢

○竹越與三郎著 第十二文豪卷 **カーライル** 定價十八錢 郵稅四錢

○山路弥吉著 第十三文豪卷 **マコーレー** 定價十八錢 郵稅四錢

○宮崎八百吉著 第十四文豪卷 **荻生徂徠** 定價十八錢 郵稅四錢

○高木作伊著 第十五文豪卷 **フルーベル** 定價十八錢 郵稅四錢

○北村三郎著 第十六文豪卷 **ゲーテ** 定價十八錢 郵稅四錢

○塚本哲著 第十七文豪卷 **ソンマル** 定價十八錢 郵稅四錢

○田村貞一著 第十八文豪卷 **近松門左衛門** 定價十八錢 郵稅四錢

○山路愛山著 第十九文豪卷 **新井白石** 定價十八錢 郵稅四錢

○人見一郎著 第二十文豪卷 **ゴーリー** 定價三十錢 郵稅六錢

○内田魯庵著 第二十一文豪卷 **ゾンバート** 定價二十錢 郵稅四錢

○德富猪一郎著 **進歩退歩乎** 定價十錢 郵稅二錢

○德富猪一郎著 **物管見** 定價十五錢 郵稅二錢

○德富猪一郎著 **人生と教育** 定價十五錢 郵稅二錢

○第二國民小說　郵稅四錢　定價十五錢

○第一國民小說　郵稅四錢　定價十五錢

○德富猪一郎著　國民叢書　風雲漫錄　郵稅四錢　定價十五錢

○德富猪一郎著　國民叢書　第一人　郵稅四錢　定價二十錢

○德富猪一郎著　國民叢書　天然と人　郵稅四錢　定價二十錢

○德富猪一郎著　國民叢書　文學斷片　郵稅四錢　定價十五錢

○德富猪一郎著　國民叢書　靜思餘錄　郵稅二錢　定價十錢

○德富猪一郎著　國民叢書　靜思餘錄　郵稅四錢　定價十五錢

○第三國民小說　郵稅四錢　定價十五錢

○第四國民小說　郵稅四錢　定價二十錢

○第五國民小說　郵稅四錢　定價二十錢

○今世名家文鈔　郵稅四錢　定價二十錢

○湖處子宮崎八百吉著　歸省　郵稅二錢　定價十五錢

○乾坤布衣著　最暗黑之東京　郵稅四錢　定價十三錢

○ウ井クトル、ユーゴー著　森田思軒譯　懷舊　郵稅四錢　定價二十錢

○德富猪一郎著　吉田松陰　郵稅八錢　定價五十錢（肖像入）

○グラツドストン　徳富健次郎纂譯　（肖像入）　定價十五錢　郵稅四錢

○武雷土　徳富健次郎纂譯　（肖像入）　定價十五錢　郵稅四錢

○格武電　竹越與三郎纂譯　（肖像入）　定價二十錢　郵稅四錢

○格朗乞　英國現總理大臣ローズベリー伯著　高木信威纂譯　（肖像入）　定價二十錢　郵稅四錢

○ビツト　平田久著　（肖像入）　定價二十錢　郵稅四錢

○伊太利建國三傑　定價二十錢　郵稅四錢

○墓府哀亡論　地源郎著　定價三十五錢　郵稅六錢

○懷往事談　地源郎著　定價二十錢　郵稅四錢

○新史　竹越與三郎著　定價四十錢　郵稅六錢

○新日本史　竹越與三郎著　定價三十錢　郵稅六錢

○歴史の片影　徳富健次郎著　定價二十錢　郵稅四錢

○國民的大問題　徳富健次郎著　定價三十錢　郵稅四錢

○第二の維新　徳富健次郎著　定價二十錢　郵稅二錢

○新日本之青年　徳富猪一郎著　定價二十錢　郵税四錢

○誕生日　徳富猪一郎編纂　久保田米僊畫　定價十五錢　郵税二錢

○一千金語　人心の明鏡處世の秘寶　梶原保人著　定價五錢　郵税二錢

○政黨論　文學博士元良勇次郎著　定價二十五錢　郵税四錢

○佛國不換紙幣發行始末并信用論　佛國ブーミー原著　深井英五譯　定價十錢　郵税二錢

○佛英米比較憲法論　法學博士本野一郎述　定價二十錢　郵税四錢

○多數撰擧之弊并矯正策　定價十五錢　郵税二錢

○國民之友　自第一號至第八號　社說及特別寄書　第一集　定價二十錢　郵税四錢

○國民之友　自第十五號至第廿四號　社說　第三集　定價十五錢　郵税四錢

○國民之友　自第廿五號至第三十八號　社說　第四集　定價十八錢　郵税四錢

○國民之友　自第九十五號至第二百十二號　十八冊合本　第十三卷　定價七十錢

○國民之友　自第二百十三號至第二百三十八號　十八冊合本　第十四卷　定價七十錢

○國民之友　自第二百三十一號至第二百四十二號　合本　第十五卷　定價五十錢

○國民之友　自第二百四十三號至第二百五十四號　合本　第十六卷　定價五十錢

自第二十一號至第三十二號十二冊合本
家庭雜誌第三卷 定價五十錢

自第三十三號自第四十四號合本
家庭雜誌第四卷 定價五十錢

自第四十五號至第五十七號合本
家庭雜誌第五卷 定價五十錢

國民新聞

定價一枚 金二錢
一ヶ月 金三十五錢
三ヶ月 前金壹圓
市外郵税 金十三錢

眼を世界の大局に注ぎ、國家を列國の間に高むる、是れ膨脹的新日本國民の任務にあらずや。國民新聞は自から此事實に任ず彼れは日本を中心として世界を觀察し、世界を中心として日本を論ず。此故に彼れは已に藩閥黨派を眼中に置くものにあらず、彼れは日本國民を信じ、日本國民の健全なる士氣を鼓舞し、振起し、膨脹せしめ、之を以て外、國交上に於て優强の地位を占めしめ、我が日本國をして[illegible]權あり勢力ある位置を、恒に世界の局面に存せしめんとを欲す。國民新聞を讀みて眼を[illegible]に向けしむるの士は[illegible]吾人が嘗の虚妄架空にあらざるを

知らむ。

外交に[illegible]の生[illegible]を要して、内自から勵む所なかる可からず。國民新聞の内政上に取る方針は物質上に富國强兵を謀り、精神上に國民的獨立的公民の教育を施し、國民の力を以て國勢を高め、國民の勢力に依りて國論を[illegible]に在り。國民新聞は國民の力を信ず。唯た夫れ深く之を信す、故に新しき[illegible]の大膽なる主張する所の精進なり、[illegible]に必ずして常に戰に先んじて之を戰ふを以て之が勵をなす如き、文學上に於て健全なる思想斬新なる趣味を鼓吹し、實業上自由、獨立を味ずきし、壟斷、[illegible]情を排斥すが如き、皆す[illegible]

世の不正を見て苟も寛容に[illegible]さず、正義を見れば[illegible]唯に及ばざらんことを恐れ懼る、如き、是れ國民新聞の[illegible]として世に許さるゝところ、今噫々たる要せず。新聞たるの智識と品格と良心とを有し、自信して自から行ふ、我邦に於ける世界的の新聞らしき新聞ありとせば、唯一國民新聞と云ふ能はずとするも、彼は其重もなる一たるを信ぜんと欲す。進歩膨脹は彼れの特色なり、彼れは進歩膨脹を首唱し、而して彼れ自から恒に進歩膨脹しつゝあり。

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 **國民新聞社**

國民之友

毎月三回三の日發兌
定價一冊 金六錢
半ヶ年 前金壹圓壹錢
市外郵税 五厘

國民之友は既に雜誌界の巨人として認識せられたり、彼の『社説』は眼と手と共に到つて大勢を洞察し、事に先つて事を論じ、靜かにしては人生の問題より、激しては時勢問題、社會問題の骨髓に衝き入る、彼の『寄書』は天下名士が特に考へ特に草したる卓論を集めたるもの、名家修備の經營に成りたる名篇を集めたる『藻鹽草』と双璧の觀をなす『史論』の痛快明透なる見識は以て『雜錄』の艷麗瀟洒なる題目と對すべく、『批評』の精嚴は『時事』の深酷に對すべく『當今之問題』あり『海外思潮』あり『經濟時事』あり、時に『大勢一班』を掲げて大勢の推移を論ず。

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

家庭雜誌

毎月二回十日廿五日發兌　定價　金五錢　半年（十二冊）前金五十錢　一ヶ年（廿四冊）仝金一圓　郵税五厘宛

家庭雜誌は社會の基盤を改善し、和樂光明なる新家庭を作らしめんと欲するものなり。其評論は平直にして其觀察は[illegible]、史談あり、古今東西の女傑偉人を淸秀なる筆もて寫し、科學あり最も懐に入り易き方法を以て物質的の文明を説き、文藝には高妙なる小説詩歌音樂譜畫評話文話あり、家庭教育兒童法衞生調理[illegible]、其他日用百般の實用物[illegible]婦人の職業衣食住[illegible]及び衣食住に關する諸事あり、雜録あり、時事一班あり、[illegible]一種の生面を開けり。

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

民友社發行書籍雜誌賣捌所

東京市神田區表神保町	上田屋
仝　裏神保町	東京堂
仝　京橋區尾張町	東海堂
仝　錦屋町	北隆舘
仝　神田表神保町	好明舘
仝　京橋區出雲町	警醒社
仝　芝區櫻田本郷町	文友舘
仝　神田裏神保町	田上書店
仝　仝	敬業社
仝　日本橋區新大坂町	鶴屋喜右衛門
横濱市太田町四丁目	國民新聞社支局
大坂市備後町	吉岡書店
仝　本町四丁目	岡島書店
仝　備後町	岡島新聞舗
仝　心齋橋通り	中村[illegible]雜
京都市新町	便利堂
仝　佛光寺通り	東枝律書房
京都市寺町通り	飯田信文堂
仝　河原町	大黒屋
神戸市榮町	船井新聞舗
名古屋市本町	川瀬代助
福岡市博多	積善館支店
仝	森岡書店
熊本市新町	長崎次郎
仝　南坪井町	好文堂
仝　古川町	網干屋
熊本縣八代郡八代町	岩本理平
仝	時昌堂
仝　菊池郡隈府町	中島常平
長崎市酒屋町	安中半三郎
仙臺市大町	木文書店
仝　國分町	佐勘書店
盛岡市中橋通	東北堂
仝　呉服町	便益堂
廣島市革屋町	積善館支店

廣島市草屋町　西村書店
越後水原町　松村六郎
長岡表四の町　目黒十平
高田町　高橋書店
〃　宝直支店
〃　高橋支店
〃　原貞治吉
直江津町　梅の屋
新潟市西堀通り　佐野仁太郎
村松町　津野口俊策
新發田町　野口向
小千谷　博進
鶴島縣福島市　漸進
〃　奥鍵田商店
〃　近松書店
白川町　今泉書店
青森縣青森町　泉進堂
弘前市親方町　
〃　上手町　
北海道札幌南一條西四丁目　振谷治吉堂
〃　室蘭港札幌通り　
〃　札幌南一條西二丁目　
長野縣長野町　西澤喜太郎
〃　松本町　水琴堂
〃　岩村田町　文盛堂
〃　小諸町　小山廣文堂
鹿兒島縣鹿兒島市　吉田幸兵衛堂
〃　金光
〃　谷村書店
〃　坂本友新聞店
川内　文
〃　新田書店
矢城縣水海道町　中
富山市東四十物町　煥平堂
前橋市曲輪町　柳正
甲府市柳町　川菊堂
山梨縣勝沼仲町　岡清助堂
出雲松江市　成清
秋田市桜町　見
羽後湯澤大町　藤兵衛
羽後酒田上書町　湯右衛門
朝鮮仁川港　鈴木喜八郎
　　山岡書店

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

041555-000-3

71-301

事務世界

民友社／刊

M28

BDH-0022